

旭亭詞長花評

天 鶴の餌を持て見に行牡丹哉
地 子の知恵をつける思ひや春の霄
人 組膝の更に小さき夜寒かな

風待ちの船に減らすや俵炭
山吹や華まで水にふます里
まねき込む揚屋の軒の柳哉

聞に出て聞かれつ虫にあしの音
隣りから見かねてるすの鳴子哉
解てやる馬の腹帯や夏木たち

遠晴れる明るき海やわたる鴈
追加 孝に踏む夜の神垣やほととぎす

晴雪庵詞長花評

天 離れ家の無事の聞ゆる礎哉
地 定まらぬ鐘のうねりや花の暮
人 行燈にもの言ふ秋の夜頃哉

打水や客の遠見めもどる門
霞晴れや島ひとつ見へ二つ見へ
水おとやさくららの下の薄月夜
額突て□た嬉しき初日かな

于時明治参拾五年九月掲之

浅 野 参 吉

春 賢 秋 酌 松 青 青 梅 松 酌 秋 賢 春
惜 盛 樂 年 濤 露 泉 樂 濤 年 樂 盛 惜
清 酌 松 青 青 梅 松 酌 秋 賢 春
流 年 濤 樂 泉 樂 濤 年 樂 盛 惜

『星會集』について 正誤表 (津山高専紀要 第二十號)

頁	上段	下段	行	誤	正
五五	上	一四	光善寺	興善寺	
五七	上	一〇	輪雪子いへる	輪雪子のいへる	
五八	上	一一	年七十八	年八十	
六〇	上	一三	三通	三道	
六〇	上	一九	片ひかな	片ひかり	
六三	上	一六	とろしか	つるしか（ルビの「問」も取る）	
六六	上	二〇	服婆物	服婆物	
六六	上	二〇	宮崎	宮崎	
六六	上	二〇	遍路	通路	
六八	上	一六	短冊のみぞ待る	短冊のぞみ侍る	
七一	上	一六	彦根藩士	四字削除	
七一	上	一六	思日	思ひ	
七一	上	一六	雪見る	空見る	
七一	上	一六	雲芝	雪芝	
七三	上	一三	遠江のルビ「とほとうみ」	とほたうみ	
七三	上	一三	葡萄のルビ「ぶどう」	ぶだう	

御教示をいただいた大内初夫・広田二郎兩先生に厚くお禮を申し上げます。

浅 野 新治郎
浅 野 久 藏
初 本 亀 藏
池 田 種三郎
初 本 百太郎
竹 井 多賀平
竹 井 豊 作

神垣に夕照りうつすもみち哉
 柳散る加茂川寒き夕べかな
 松はらや傘を疊めば蟬しぐれ
 鴨川の瀬にひびきけり鉢たゝき
 朝かほや東雲^{しのめ}やぶる鐘の聲
 笠叩く樹々のしづくや閑古鳥
 蚊もつめて来るや隣は風呂煙り
 鶴ならで雉子に寐覺^{さめ}つ□とまり
 あみもれの海老はねにけり茨のはな
 筆の穂もやせて秋行□晴かな
 峠までふもとの擣衣聞へけり
 波をふりく驚けりはるの海
 ひろき野に聲澄朝はうつゝ哉
 庭くらき竹の月夜やむしの聲
 御手洗の人曇らせるさくら哉
 うしろ日に照して越すや秋の山
 人波をおす浮足や水屋職
 薬玉に來るやすだれは□□風
 雪まくやしがらみを摺るふねの音
 荷にさした鎌の刃を追ふ毛虫哉
 こぼれたる炭の光りや山の月
 昼かほや火を踏むよふな暇^{なはて}みづ
 雪折れの松引きこめて藤のはな
 歸り帆を追ひ來るよふぞ夏の雨^や

勝

黒 備

全 青 朝 一 青 中 松 田 南 新 永 杉 不 華 朝 全 線 佳 清 青 山 竹 朝 新
 荇 青 久 泉 濤 柳 花 樂 雪 朽 山 青 々 樂 流 江 友 青 花
 しろふ降るあめや錦の艸の上
 夕立のあとやひびきし斧の音
 見返れば柳はおれて卵の烏
 蟬なくや雨の根切れし雲の道
 送り出た客にしぐるゝ舟場哉
 遠山の朝から見ゆる暑さかな
 松風を瀬のおとにして天の川
 三保に來て見ゆるやふ士の五月晴
 人聲の絶ゆるやひくふ飛^うはたる
 其處^{そこ}此所^こにかね呀へわたる都かな
 隣りにて夕照りうつすもみち哉
 虚無僧の笠にゆめ置く小蝶かな
 風波を起すすだれや夏ざしき
 時ならぬ庭の落葉やかたつむり
 今聞て今買ひにけりはつ松魚
 疊み目に鯉のひれふる扇子かな
 幾としもおなじことばの御慶哉
 宮城野やすゝきに重き朝の月^ひ
 上段は二度の子供のひるなかな
 年間へば笑ふて過ぎぬ鉢たゝき
 鴨啼や片田に月の薄あかり
 さゝ波にかけ流しけり納涼ふね
 追 玉巻て谷をとりまく芭蕉哉
 加 嬉しさや花に出揃ふ一在所

全 判

川

備 川

永 全 清 青 朝 永 新 雲 梅 一 松 西 花 中 野 青 新 茶 一 松 壽 春 青 松 流 冬
 樂 流 荷 音 樂 花 隣 外 樂 花 樂 志 隣 樂 惜 隣 隣 芳 青

かけと樋に□□□□□□りけり
 人聲のすれば出て見る日永哉
 雪積で暖^{ぬく}ふ見へけりはだか山
 朝寒や出船の後のこぼれ米
 柿ひとつ梢に赤し秋のくれ
 いつ袖に入りし落葉や冬ごもり
 水につけ見せて吹越す落葉かな
 道間はれ家は留守なり閑古鳥
 願ふ身はかげさへ踏まず神の梅
 行燈に物云ふ秋の夕べかな
 秋のいる見えけり水の流れにも
 この峠越せば□ほの清水哉
 寐おしんでふたゝび出たる納涼哉
 おき所の定まりもせぬ蚊遣かな
 みだるゝも風暗なりけり雨の萩
 さゝ壁のいよ太りけり煤拂い
 近道のにくゝ濡れ覺つゆの朝
 蹴上げたる鞠に雨降る柳かな
 むしろ戸にもる風寒し啼千鳥
 □□□□□□除夜のかね
 夕立のおとにひゝくや斧のおと
 立並ぶ樹々やもみぢの生ひ照り
 雪散るや走しる子供の鈴の鳴る
 夕からす風をよけゝ戻りけり

備 伯

勝

秋 樂 不 朽 佳 樂 二 葉 女 安 樂 青 空 青 樂 壽 樂 青 樂 線 々 竹 甫 靜 海 音 空 全 樂 秋 樂 暗 花 玉 陽 賢 盛 山 江 青 久 永 樂 全 普 石 光 中 花 梅

豊年のしるしや今日もゝゆき
 山蟻の曳くや花見のこぼれかな
 寐直ればまくら冷たし後の月
 時雨るや啼かで鴉の寐たの□る
 けむりより外に物なし雪の朝
 笑ふ子は借りても見たし秋の暮
 霄に見る雲はながれて天の川
 木の葉踏むおと□白しふゆの山
 むし啼や貸家と札をはつた家

勝山看雲庵宗匠撰

天 秋淋し那須野に割れた岩の跡
 地 水おとやさくららの下の薄月夜
 人 夏の月翌日を氣安ふ忘れけり
 夕からす風をよけゝもどり覺
 雨晴れしばかりの門とや涼み臺
 風買ふて雨のひと日の永さかな
 笠脱げばよき風かるし夏木立
 綿を□くけふや朝から海の風
 紅竹や霖雨晴れを□盛り
 水を釣る外に音なし蟬の聲
 ゆき積んで暖う見へけり裸やま
 蹴上げたる鞠に雨降る柳かな
 海にしほなき朝風やけしのはな

美 石

下

川

永 樂 甘 江 輝 松 見 濱 弓 賢 盛 青 淵 朝 青 線 々 普 岩 朗 藤 山 永 樂 華 山 梅 花 朝 青 玉 陽 青 樂 青 江 山 月 清 流 佳 樂 賢 盛 線 々

備						勝		備	勝		備		新	全		坪		全	全
青中全	秋	佳	不	靜	全	壽山安	圓中青	晴山永	晴	竹中永	佳庄晴	線	全	靜井永	美作男	鼓角			
藍	樂	樂	朽	海		樂	樂	月	空	花	樂	暉	甫	樂	樂	暉	人	海	樂

兵にする樂みやはつのぼり

春の日の見たさわするゝ花見哉

百八のかねも豊やとさの春

花遊びうつりやすきは人ごゝろ

軍して心は強し冬の月

吹くやうに好かれて無事な柳かな

我書いて讀めぬ字もあり大三十日

昨今山の見かはるつゝじかな

おぼろげの離るゝ月や時鳥

以上 七拾壹章

追加

參り人のます日や寺のかね霞

龜齡園尾川

画工

雲巖

(句の下に美事な肖像画が書かれてゐる)

千 秋 萬 歲 樂

清

記

明治三十四年三月吉辰

新西下	勝上村	新西下	新西中	勝上村	新西下
梅香庵	流溪堂	鶴齡堂	天遊堂	開化庵	勝上村
一二三	梅月	龜山	月勝	いろは	社傍庵
					森雫
					高松庵
					豊里

勝山町 玉雲宮奉納額

奉納四季發句參千貳百餘章之中

越中黒髪庵宗匠撰

天 年間へば笑つて行きぬ鉢たゝき
地 ちゝのんだ子とも思はず角力とり
人 隣りにて夕照りこぼすもみぢかな
菊のはな□□□□□□□□燈り哉
風買ふて雨のひと日の長さかな

海業や椽にひらひし蛇の目傘

明り曳く小まどに梅のにほひかな
はなに着た笠やぬらさむ初しぐれ
水すむ□□□□□□□□芦の雨

廣い野に聲澄む朝のうつつかな

入梅ばれや松にたゞよふ夕けむり

松風の壁にこたゆる寒さかな
たわむれに曳けば禮云ふ鳴子かな
出代りやなみだつゝんで笑ひかほ
道問へば鎌でさし圖や夏の雲

うぐひすに咄取らるゝ初音かな
花嫁の手際見せたり大根ひき

今戻る月をかしむやほとゝぎす
すみ切たはとの啼さす川圖かな

市瀬	見明	勝	川	松	川	勝	玉	山	耐	青	本	杉	山	青	陽	勝	全	朝	戸	賢	永	賢	山	青	全	美	戸	觀	山	新	梅
惜	圖	隣	圖	陽	平	泉	雪	荷	音	盛	樂	盛	樂	盛	樂	盛	樂	山	月	花	露										

手も揃ひうたも揃ふて田植かな
 つみきつたやうに出揃ふいなほかな
 しづくする竹がためたる夏の月
 春の月浪なき海をのぼりけり
 蝶の寐たまゝ手折たき牡丹哉
 樂しみの久しき菊の主かな
 椎ひのきはさみて目だつもみぢかな
 春めくや山家のはれにひるの風呂
 思ふほど指の動かぬ寒さかな
 暮るゝ日を花のだきこむ牡丹哉
 かた枝はかれたまゝなり帰り花
 はらゝとして止む雨や冬隣家
 若竹にあまる重さや今朝の露
 三十三才雪をくぐりて來り覺
 月ひとつ願は田ごとのながめ哉
 蟬なくやからりとやみし雨のあと
 福壽草ともに開くや硯箱
 月に手の届きさう也海の上
 虫すだく處たちつる案山子哉
 逐はれても稲にまた來る雀かな
 蕾から薫のたつや梅の花
 一聲はあいさつらしや渡るかり
 小むすめのひとり料理やひなのぜん
 さまゝの人に出逢ひし花見哉

戸賀 喜月 海の音も静き夜なりおぼる月
 鳥羽野 鳥家きぬ女 狩人の田にも立てよる案山子哉
 西中 神田仙女 しづくするやうなり竹の青すだれ
 西中 道樂庵喜遊 雨はれし寺のまうへやほとゝぎす
 上村 榎酒舍澤女 寐るときに今一度焚くかやりかな
 余野 哥好 葉に花の影おきあまる牡丹哉
 高野 順風 嘶て駒のもどるや夕月夜
 田熊 鶯宿庵梅雨 長き日を鳴き暮らしたる雲雀哉
 西下 古松庵浪月 つぼみから位のつきし牡丹かな
 西下 清風庵美川 元日にかけ改る時計哉
 上村 雲外 むすめらもかどまでは出てすゝみかな
 高倉 翠松 人にかす火も出してあるひがん哉
 上村 杜傍庵森雪 わか草や草履に透ふす朝しめり
 市場 増縁 目でたさを告げて來にけりはつからず
 西下 天遊堂月勝 ちるまでも牡丹きる日のなかりけり
 中島東 井唯 門口に犬の居眠る小春哉
 中島西 菊女 ちる花もさく花もあり萩の庭
 上村 浪江女 いろゝに咲て美しきくばたけ
 為本 春翠 啼ひばり姿も見せずなりにけり
 西下 竹虎 あら浪のまにゝ見ゆる千鳥哉
 西下 繁 子供等の手際にいらじ雪だるま
 為本 好眠 青々と茂る柳の小枝かな
 河面 梅香女 さかづきにうけても見るやちる櫻
 廣野福井 光輝庵 ひなだひてだかれて來たり雛の客

伯耆 日本庵波伯 勝間田 松子
 西中 青霞庵花月 高野 龜鶴
 アヤベ 春光舍千花 西下 花開庵いろは
 アヤベ 千島 西下 千島
 西下 平井庵薫 山香
 西中 朝日堂照女 下野田 正月庵壽
 西下 梅香庵一二三 松花
 西下 松花 上村 勇樂
 上村 松樹 津山 玉の家松月
 石生 花邱園正葉 西中 老勝
 アラウチ 梅月庵井花 西下 高松庵豊里
 アヤベ 今月 上横田 快山
 日中 遊樂

人 開く香の洩て床しや窓の梅
地 開いたる扇子の釣や膝の上
天 開け行御代や矢竹は菊の杖

追加

蓮開く音や氣味よき朝朗あさばらけ

同上 花評三光

一分園詞長撰

人 霞の戸開や笑ふ不二築波(筑)

地 梅が香や遠き運びと思ほへず

天 海棠や一間に開く金屏風

追加

開け行八声の鳥や日のはじめ

同上 三光

含香亭詞長撰

人 去年の闇かけて開や福壽艸

地 開いたる袖中廣し御万才

天 昇る旭に連て開や冬櫻

追加

誰もかも開運したり御代の春

和花
山海
看海

維時

明治二十九年三月吉辰日

東井和
山本看海

五白

勝北町 新善光寺大師堂奉納額

永代奉納發句集

龜齡園尾川大人撰

河面

鴨耀堂吟月

勝南吉留 湖月

下野田 一聲

是宗 秀翁

西中 作花

勝南吉留 千鳥

上町川 一淺

余野 遊樂

西中 鶴齡堂龜山

高野 旭昇庵若鷺

津山西新町 尺素

滝本 有花

津山西新町 兼世女

上村 京家庵一流

發起大願主

東井和
上 蓮池心外
西 山崎正翁
全 小澤誦月
武本五尺

眉山

春花
看海
春海

金猫

看海
五尺
看海

あきもはや落し水底見せにけり
長閑さや海にも人のあしのあと
瀬の音は遠し雲雀の啼く日和
なみ音にこえも消さるゝ千鳥かな
葉からはへこぼす光やはすの雨
蚊に添ふて来るや隣の夕けむり
明月や山をはなれて人の上
菊さいてながゝの世話わすれけり
にほひにはかきなし梅の雨隣
水落す音にぎはしき棚田かな
小春日や猫の寐て居る回り縁
名月やもどりて門にまたしばし
かきのねにかたよる風の落葉哉
初雲雀朝日と共に昇りけり

横みして見る間に開く初日かな
譲らるゝ世の樂しげや藏開き

開く間の樂み深し懸の処

能きみつ葉扇子に乘せて開きけり

蓮の花開けり音の聞へけり

開く戸や二見が浦の初日出

開いたる袖中廣し御万才

開いたる舞臺の花よ初芝居

開く戸に梅が香入や朝の風

昇る日につきて開や福壽艸

開く香の洩て嬉しや廬の梅

三夫婦は目出たしけふの藏開き

開けたる花は誠の匂ひかな

開けたる道を運びし礼者哉

餘慶ある家に開や福壽艸

足も地につかぬ運や風登り

世を譲る子を先立て藏開

子の運も見上る門に幟かな

運ばせた荷物の數やくら開き

昇る日に開き輝く牡丹哉

開けたる薫りも高き菌かな

谷の戸を開いて霧の登りけり

從 是 三 光

人 明る夜のしらせや蓮の開音

山 看手海

地 開いたら伽羅の香高し白扇
天 開く戸や初日輝く金屏風

中 看海

追 加

春谷花

開く戸の運びも早し初日の出

正翁

同上 副評上座 二十章

誦月

旭陽堂宗匠撰

看海

開運の夢や知せの富士茄子

中ハガ上 看海

開扉の日延沙汰あり遅さくら

中ハガ 鐵州

開いたる袖中廣し御万歳

吉 後 殘ガ 笑

開運は燈明にあり初巳午

西ハガ 秋花

開く程薫りの高し梅の宮

看海

下寒み持て運や花の雲

看海

道廣ふ踏み開きけり花の山

看海

垣越に匂ひ運や菊の花

看海

炉開や上座に直す殘花客

看海

運ばせる御所の車や初さくら

秋花

朗に明て開くや池のはす

鉄州

潔よき聲の運や櫻鯛

看海

開扉の日とて賑はし日傘

正翁

鶴も巢を運て松のみどり哉

山海

杖運ぶ手はまた遅し梅の花

看海

玉□を扇子開いて貰ひけり

東ハガ 古松

雲の襟開くや月の丸襟

從 是 三 光

從 是 三 光

看海

誦月

冬青

古松

誦月

看海

看海

看海

誦月

鉄州

看海

春花

看海

看海

看海

竹山

心外

看海

正翁

和花

看海

看海

驚や兩手かさねる節の上
敷臺に猫の爪とぐ小春哉
軸 武器藏の戸もあけてあり蟬の聲

曦 洲
福 壽
蝶 夢

久世 濯文館副評

卷頭 ものゝ香によらぬ蝶飛ぶ小春哉
軸 晒井や心持よきひやし酒

露 光
月 嶺

追 加

明月や燈かげも夜の色に似て
朝寒や柱に移る釜の湯氣
簞目の月の際たつ今宵哉

松 露
冬 青
錦 浪

明治十有五年孟冬獻之

旭町西川 千手寺内稻荷社奉納額

奉 額

開運二字讀込四季皆題發句集
五百唸内芳声五十章

正 評

看雪庵宗匠撰

西

川

初午や開運守護の備へもの

上

霧も巢を運や松の花盛り

正 口 翁

開願の曜嬉し三月過鳥
香を風も乗せて運や濱の梅
白菊や左右に開く朝の闇
快よくけふ開きけり花の宴
朗に明て開くやいけの蓮
炉開や鐘子の沁る四疊半
新玉や目出とふ開く福壽艸
日に露に開く木通の太りかな
尽ぬとも開けて清し磯の松
開く運重致しや鏡もち
鶯や初音と共にひらく梅
薺の開やふ二の明けしらみ
開いたは揚羽の蝶のつがひかな
雪明や開いた窓に茶の煙り
杜若開いて亀の浮日かな
打上て雲も開かす花火哉
開く程樂しみ深しはなの山
井開や子に燈火を提させて
開きたる大きな花の牡丹かな
音聞て出る間に開く花火哉
開たる窓や氣味よふ風薫る
花の香に心も開くよし野哉
薄□も添ふてひらけり花火哉
接たるや初芽開くを花心ろ

市 西 同 同 西 西 東 中 東 西
看 春 誦 看 正 竹 竹 誦 看 正 看 看 看 若 看 正 五 正 誦 川 竹 川 看 ガ 山 和 心 ガ 竹 川
海 惜 月 海 嘉 山 山 月 海 翁 海 海 海 水 海 翁 尺 嘉 月 山 海 水 外 人

眞島 看雪庵撰

透逸 雨に淋しき坂のうしろかな
 手をうけてまづ雨の降る青田哉
 撫ながら昔を語るさくら哉
 縫ひ廣げぬひゝろげゝり兒の頭巾
 手廻しに壁ぬつた夜の寒さ哉
 櫻散るよふなこゝちや春の雪
 涼しさや竹の下行く水のおと
 町並の軒逆わぬ燕哉
 明月や渚よこきる蟹の船
 日ゝ疲る淀の川瀬や蟬の聲
 蜻蛉や子に追はれては元の石
 江の魚のちるや日傘の疊む陰
 香は藁に納まる雨の牡丹かな
 梅見るや雪に似た髯撫ながら
 米をとく桶に散り込む柳かな
 向ふ島日は照りながら時雨けり
 茶に酔ふて梅を見に出る夕哉
 鼈の泥を動かす小春哉
 行春や水の流れに氣の移る
 家毎に月の宿なり須磨の浦
 折て置く花も花野の榮り哉
 護花鈴に驚く蝶のつがひ哉
 汲んで來た水の自慢や心太

福 壽 全 蝶 夢 一 彦 福 壽 六一 曦 洲 春 妃 露 光 玉 露 月 村 一 彦 曦 洲 全 嶺 梅 枝 對 山 全 月 村 露 光 月 嶺 月 村

おとたちし岩の曠もみや葛紅葉
 あら波の頭すくうや飛ちどり
 松島も見ゆる日和や菊の花
 すゞしさや松にすと合ふ月の影
 鹿に目の覺て小さき行燈の灯
 海へ出す松檜あり鹿の聲
 しか鳴や寐てから翌日の旅嘶
 足袋ぬひで置所なき花野哉
 夜に足らぬ月を見に出て田植哉
 蟬啼やすつぽりぬけし椽の釘
 うぐひすや松を見こしの小松山
 透きとふる棚の葡萄や月の照り
 無□野に馬の子歩行花野哉
 南天の實艶うつくし初時雨
 籠を垂る雫の輩のほひ哉
 紅とひて塗たよふなり初黄葉
 有る水をよそに貰ふてところてん
 合せ勝菊の香高き座敷哉
 珍らしき松のしらべや初嵐
 庭四隅そつと見へ曉夕紅葉
 霧は皆海へ吞まれて月今宵
 暮て越す峠のながし鹿の聲
 たまにさす日のかびくさし五月晴
 椽に出て猫の伸寐や梅の華

光 石 福 壽 月 嶺 玉 露 月 村 春 船 福 壽 全 玉 露 對 山 玉 露 光 石 一 彦 梅 枝 千 哉 都 月 千 哉 梅 枝 千 哉 都 月 千 哉 梅 枝 蝶 夢 稻 景 玉 露 露 光 全 都 月

すゝしさや松に摺合ふ月の影
 江の魚のちるや日傘のたるみ陰
 蝶飛ぶや暮の鐘まつ畑のうへ
 蟬なくやすぽつとぬけし椽の釘
 響て寐る翌日のひてりや鳴く衝
 鹿に目のさめてちいさき行燈の火
 はる風のちから見へたり帆の丸み
 朝寒や松の雫の眼に觸るゝ
 きくの香に降りしづめけり宵の雨
 打浪に崩落けり岸の雪
 明けはなす間こしの庭や菊の花
 椎檜は寐るおもひや皐月雨
 旭のさして香のたつ庭の牡丹哉
 群て飛ぶ蛸あぶや寒けき暮の雲
 朝寒や野末に月の薄こあかり
 寐あまりて淋しき比くらや虫の聲
 運ぶ脚見せて日の照る紅葉哉
 筈をつるあかりの細し雁の聲
 むしの音を殘してたてる天戸雨哉
 明月や松の雫の遠ひかり
 寐しづまる小家の門や蟲の聲
 山かげをしばらくたゝむ日傘哉
 すゝしさや竹の下行水の音
 存分に見て日の高き櫻かな

玉 露 一 彦 月 嶺 對 山 靜 □ 月 嶺 六一 露 光 一 彦 月 村 蝶 夢 福 壽 玉 露 月 嶺 蝶 夢 一 彦 蝶 夢 曦 洲 玉 露 六一 月 嶺 曦 洲 月 嶺

旅人の寺の名をしる黄葉哉
 雪積て輕う夜明る小家哉
 若水や常とも違ふ汲ごゝろ
 大空に鳴き廣げたる雲雀哉
 待て居る連つれの見て出す日傘哉
 外よりも内の脈はしのち後の月
 梅さくや寛の水の音たかし
 腰かける椽の廣さは後の月
 うつすりと殘して月や梅の花
 行春やまだ晴きらぬ山のきり
 吹く風の行衛見送る青田哉
 おもむろに夕日抱込む牡丹哉
 湖の際から吹きぬ初あらし
 初花や素肌はだかに寒し間こし風
 白菊や日の暮殘るはたけ□
 築きかへた山のしまりて皐月雨
 こがらしや海に落込む鐘の音
 獨居のそゞろ淋しや虫の聲
 日のたゝぬまではつもりぬ春の雪
 空はれてちらつく雪や梅の花
 初花や庭に手入をした不足
 はる風の吹きはのこし覺麥の艶
 軸 駕籠通ふる文は道ある花野哉

春 妃 福 壽 千 哉 梅 枝 春 妃 楳 枝 月 村 梅 枝 柳 景 月 嶺 玉 露 露 光 月 嶺 光 石 福 壽 梅 枝 春 妃 千 壽 都 月 蝶 夢 玉 露 光 石 福 壽

發起

富村 布施神社奉納額 (二)

奉懸雜俳句集

巻頭

俳 林 堂 撰

天地サ山

早わらびをおりつとりつ春の山

トミ

角

國尽し

志摩つして肥後ろのひ美濃伊勢參

トミ

風

入交り

馬と出てゐる牛の市

トミ

永

この頃は神のみ影
でまめにになり

病平ゆゑ入るこゝろよし

トミ

歳

丸い事はが
まん丸くぞ

わじゆんで月日たつ家内中

トミ

遊

天地サ山

さくら狩茶弁當から登る山

トミ

歳

魚尽し

こちふくといか入鱒いわし網

トミ

風

もち月夜

杵のさきまでうす明り

トミ

壽

入交り

ふかひなじみの湯友連

トミ

猪

折イカ

一味揃ふてかたき討武士

トミ

月

國尽し

伊賀落て美濃おふきいが丹波栗

トミ

風

此頃は神のみ影
でまめにになり

病もぬけて生へた黒かみ

トミ

叢

風に槌

浪もうち出の濱あらし

トミ

猪

狭小倉

朝旁に人にぞみへね野辺の道

トミ

笑

天地サ山

作州でさらくとの名の高ひ山

トミ

風

尻に口

あてゝわらふた火吹竹

トミ

子

天地イ戀

色く／＼と嘶の數もつもる戀

トミ

江

魚尽し

ちぬられていかひにべますち乞ふり

トミ

風

丸い事はが
まん丸くぞ

宮のいち

兎が餅をつき臼の中

トミ

猪

浪のこひ

浪のうちかけいつくしま

トミ

歳

入交り

四方の咄をせん湯や

トミ

風

折ヨモキ

よもすがらもゑて凄し狐の火

トミ

子

國尽し

喰て美濃よひ味駿河信濃そば

トミ

遊

天地サ山

櫻共梅ともいわず眠る山

トミ

月

此頃は神の御影
でまめにになり

祈れ茶の味しら髪まで

トミ

風

宮のいち

朱塗で光る日の御崎

トミ

叢

狭小倉

鳥居から行も歸るも數百度

トミ

永

天地イ戀

いつなりと忍びあひの戸明て戀

トミ

子

折イカ

岩戸を開く神の御神樂

トミ

永

丸い事はが
まん丸くぞ

たらひの水にうつる月影

トミ

笑

魚尽し

かれいとて心ざし鯖ありがたい

トミ

遊

入交り

川もおち合くだります

トミ

角

鳥 郡

小田のあいだに巢をくいな

トミ

風

宮のいち

こしらゑて目にたつ鳥居

トミ

遊

浪の戀

しのびまゝ夜をあかし浦

トミ

則

天地サ山

盃の順もくるふや華の山

トミ

月

狭小倉

おのづから風の吹しく萩薄

トミ

園

もち月夜

きねうすく／＼と見へるかげ

トミ

遊

國尽し

かいおきをするが越後の縮しま

トミ

則

折ヨモキ

よくきけばもの音ぞかし雉子の聲

トミ

則

魚尽し

たかふても酒を呑たい氣が鯛

トミ

角

春 爲 幸 理 光 千 彌
風 亦 花 則 惠 角 五

作北の俳諧額

明治大正期 三

仁 枝

忠

(昭和五十八年四月三十日)

富村 布施神社奉納額 (一)

奉納雜俳句

鶴 南 舎 選

秀逸
にがくし

言葉に角を立た顔

折イツカ

いつ迄も續た茅の片庇

天地ヒ影

日の本に□ゆしからは神の影

見苦しや

さまをからげた尻が出た

兎や角と

下でとりくかみの事

天地ノ祭

呑うたひ騒立たる雛祭り

思ひ立^{たち}

年寄つれのよひ茶摘

折イツカ

岩戸をも伴ひ開た神樂歌

天地ヒ影

ひひやりと汗吹風を松の影

兎や角と

い^(は)われてたてる茶せん髪

折ウツキ

腕先の強^(?)くゐをとす君のうヨノ社富仲當
下理楠間正村文
中理春谷正東壽村東
トミ
中富當

則 則 林 子 江 則 風 賢 永 丸 賢 永

おつとよひ
折イツカ
兎や角と
折ウツキ
天地ヒ影
全ノ祭
見苦しや
全
おつとよひ
にかくし
折イツカ
兎や角と
しめ付て
見苦しや
天地ヒ影
兎や角と
見苦しや
折イツカ
見苦しや
おつとよひ
しめ付て
見て置た
兎や角と
にかくし

下戸が上戸を思ひさし
威徳かやつひ投筆で書文字
盗人のあしあと評議
浮雲に目は隠^{かく}れてきた時雨
一息は暑^{あつ}をしのぐ柳影
乗駒の氣も勇たつ加茂祭
しらぬ顔してまた出した
晝中にまた出して寐た
夕立雨におふたみの
譯もなく子を呵る親
ゐて見てもつらりどう讀鐘の銘
い^(は)われずいふてよめの髪
晝夜に汗の油しめ
アノマア顔のしわ狂ひ
引て来る松の移るや子日影^{おひ}
人がいふ女の賣残り
恥をしらがのしわ狂ひ
いつもなく積る落葉や神の留主
よごれた尻をしらぬ嫁
早い氣性のまはる酪
水も□□よふかけておけ
宿のおすてのかんばんを
もてなしのよひ茶屋のかゝ
主に迷ふ□の路へ□□

當 當

忠村 春風 荒猪 正連 春風 千村 花鳥 東丸 正連 花遊 春風 壽永 社風 春風 理則 吉女 村東 爲東 理則 東丸 楠林 千角 谷水 妙子 正子 千年